「文字との出会い」と「人との出会い」

御調西小学校　藤井　浩治

一．「書」との出会い

私は、小学校高学年の時に担任していただいた恩師の影響で、書が好きになりました。小学生時代の私は同級生と比べても極端に体がやせて小さく、体力もなかったので、体育は全くできず、勉強も決してできることはありませんでした。

担任をしてくださった男性の教師は、書が好きな方で、黒板には毎日とても整った文字で字を書かれていました。私はその文字を毎日あこがれながら見ていました。

私もたまたま家の隣が習字教室の先生でしたので、二年生くらいからその教室に通っていたこともあり、唯一学校での「書写」の授業が楽しみでした。何をさせても人並みにできない私でしたが、担任の先生は毎回のように書写の時間には私の書いた半紙を掲げて、「みんな藤井くんの字に負けないように書きなさい。」と褒めてくださいました。

しかし、今考えてみると、その当時の私は特別に書がうまかったわけではなかったのだと思われます。なぜなら、クラスの代表として書写の大会に出品させてもらってはいましたが、特に大きな賞をもらったことは一度もありませんでした。また、習字教室から出品した時も同じように大きな賞をもらったことは一度もありませんでした。つまり、担任の先生は、他に何もできなかった私に自信を持たせようと、ちょっぴりうまかった私の書を取り上げて大げさに褒めてくださっていたのでしょう。

子供ですから、この担任の先生の言葉が嬉しくて、自分は書がうまいのだと勘違いしてそのまま、いつのまにか書の道を歩むようになっていました。また、私が教員になろうと思った理由の一つにも、この先生との思い出が大きくありました。「褒めてやることで子供の人生を変えることもある。」大切なことをこの先生から教わりました。

私の勤務する御調西小学校の卒業生でもあり、高名な彫刻家である圓鍔勝三先生も小学校時代に担任の川井先生に自刻のハンコを褒められたことが彫刻家としてのスタート時であると述べられていますから、小学校時代の経験は人生においても大きな影響を及ぼすのだと改めて感じます。

二．中学校の教員として

その後、高校の書道部顧問の先生から薦められて、書道の専門的な大学である大東文化大学に進学し卒業した後、中学校の国語科教諭として、広島県に採用されました。中学校教員としても得意の書写授業を中心に指導を行っていましたが、生徒達から「自分の文字が嫌い」「書写の授業が嫌い」「字を書くことがいや」という声をよく聞きました。きっと小学校において人生で初めて「書写」に接したときに良い出会いをしていないのではないか、それで「自分の文字」に関して劣等感を持っているのではと感じました。

私自身がそうであったのと同じように、子供たちに文字（書写）と良い出会いをさせてやりたいという思いが強くなり、小学校への異動を考えるようになりました。しかし、私は小学校教員の免許を持っていなかったため、勤務をしながら通信制の大学で学び、免許取得後九年間の中学校教員生活を最後に小学校に異動することになりました。

三．小学校教員としての出発

小学校教員となると同時に市内書写部会の事務局（世話役）をさせていただくことになり、市内の小学校で子供達に書写と良い出会いをさせてやりたいという願いを実現するためリーダーシップを取ることを決意しました。しかし、当時の私が行っていた書写授業は、子供の前で毛筆を使って何度も書いて見せ、瞬時に個別指導を行い、欠点を指摘して修正することで子供たちの文字を完成させる授業でした。確かに子供達は上手くなりましたので、これが良い授業と勘違いをしていたのです。

私がある提案授業を行った後の協議会の場で、ある先生から「素晴らしい授業ですね。これは藤井先生しかできない授業です。」と言われた時さえ誉め言葉と勘違いをしてしまいました。その言葉の裏には「（藤井しかできない）他の教員にとっては参考にならない役に立たない授業」であるということだったのです。冷静になってその言葉の意味を考えた時、私は自分の技術と勘に頼った授業をしていたことに気づき、恥ずかしさでいっぱいになりました。

私は本当に子供達に、書写と良い出会いをさせていたのだろうか。書写の教育方法についてもう一度学び直すために、書道の専門の学科を有する安田女子大学大学院に進学することを決意しました。

四．大学院での出会い

大学院では、当時の小中高等学校の書写書道の学習指導要領を作り、全国の大学の書写書道教育を牽引されていた久米公（いさお）先生と永年小学校の書写教科書の編集に携わっていた安田壮（つよし）先生との出会がありました。

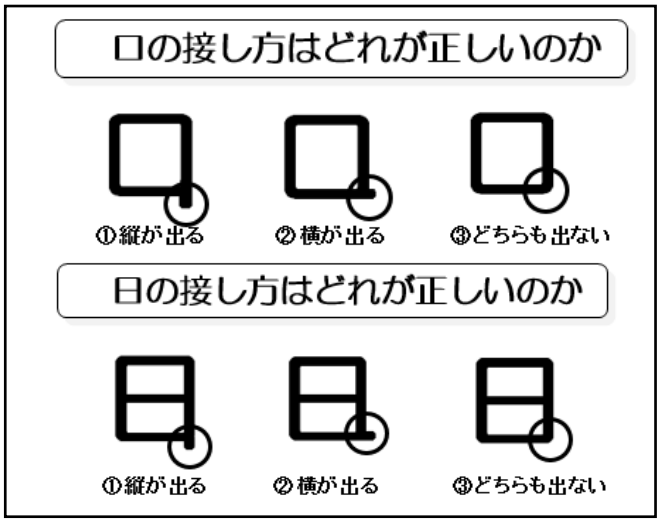
久米先生は、初めての講義で「自分の字を好きでない、文字に劣等感を持った人の気持ちが分かるか？」と問われました。文字を上手く書くことができない人の気持ちが分からなければ、良い授業はできないということをおっしゃられているのでした。常に子供の目線に立って授業を考えること、子供達に考えさせる授業を創ること等々、自分の実践した授業を基に熱く語られました。この時、これまでの私の授業は子供達に教え込みの授業であり、全く話にならない授業であったということを思い知りました。

この久米先生、安田先生との出会いで、私の書写授業への考えは一変しました。大学で書について学び、中学校の教員としてスタートし、通信制の大学に通って免許を取り、小学校に異動し、大学院に進学し、物わかりの悪い私ですから本当に遠回りをしましたが、やっと真理にたどり着いた思いでした。

このように、「文字」を通しての「人との出会い」は、私の人生において何度も導いていただいた大切なもののように思います。

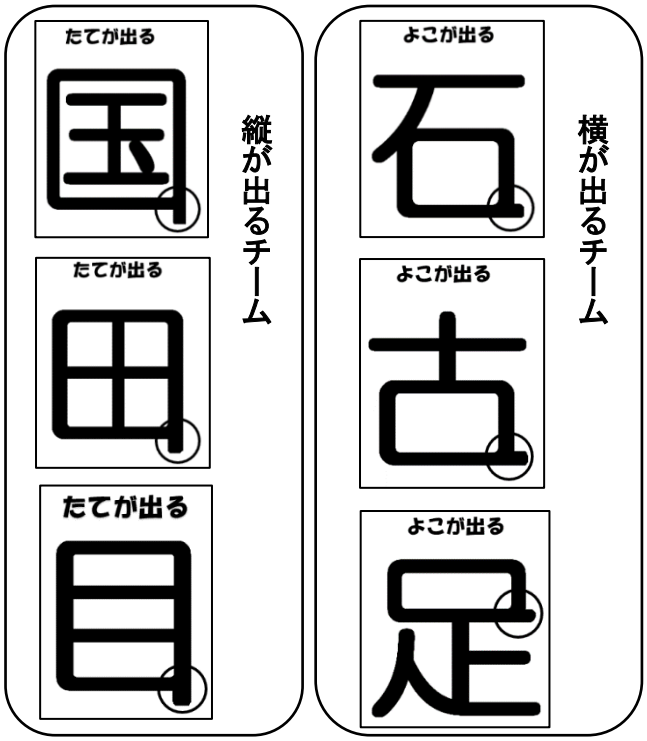
五．楽しい文字の話

私がこれまでに学んできた中から「文字がちょっとだけ好き」になり、「文字について少しだけ興味を持つ」ことのできるお話を紹介します。　漢字の「画の接し方」についてのお話しです。



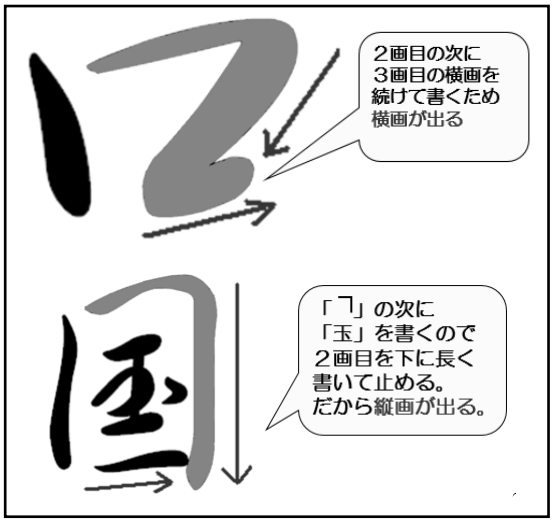
上の図を見て、「口」の最後の画の接し方は「①縦が出る②横が出る③どちらも出ない」のどれが正しいのでしょうか。また、「日」の最後の画の接し方は「①縦が出る②横が出る③どちらも出ない」のどれが正しいのでしょうか。

これについての解答をする前に、接し方についていくつか漢字を分類してみることにします。



さあ、それぞれのチームの共通点に気がつきますか。その通り、「横チーム」は、全て口の中に何もありません。それに比べて「縦チーム」は、口の中に『玉』があったり、『十』があったり、『二』があったり、すべて何か点画が入っていますね。

それでは、どうして口の中に点画があるないで接し方が違ってくるのでしょうか。



上の図を見てください。「口」を速書きすると、「コ」の部分を続けて書くようになるので、最後の横画が出るようになります。「国」の場合には、筆順では、「コ」を続けて書きません。

「国」は「冂」の次に「玉」を書きますので、折れた後の縦画を斜めにすると「玉」が書けなくなります。そこで、「玉」のスペースを確保するために、縦画をまっすぐ下の方向におろすと共に、少し長めに書いておき、最後に横画を縦画にぶつけるようにして止めるのです。ですから、中に点画のある口は縦が出ているのです。

それでは、最初の問題の解答をします。「口」の接し方は、横が出る。「日」の接し方は、縦が出るが正解となりますね。

接し方の決まりをまとめると次のようになります。

「接し方の決まり」

① 口の中に何もない場合（コを続けて書く場合）は、横画が出る。

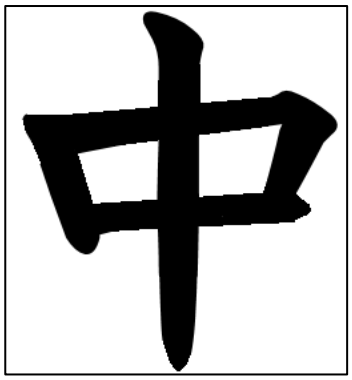
② 口の中に点画がある場合（コを続けて書かない場合）は、縦画が出る。

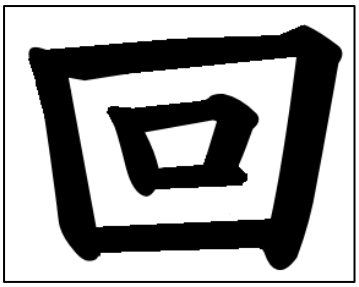
それでは、ここで応用問題を出します。「中」という漢字の接し方について、横画が出るのでしょうか。縦画が出るのでしょうか。「中」は「縦画」が「口」を突き抜けています。口の中に点画があるような、ないような中途半端な漢字ですね。

「中」は「口」を書いてから、最後に縦画を書きます。ですから、「口」を書いた時点では、中に何もなかったことになります。そして、「コ」を続けて書くのですから、もちろん「横が出る」というのが正解です。

最後に「口」という文字を二つ組み合わせた「回」という漢字の接し方は、おもしろいです。「決まり」に当てはめると答えがすぐに分かりますね。内の「口」は中に何もないので、「横」が出ます。外側の「口」は中に「口」が入っていますので「縦」が出るのです。

同じように「口」を二つ書くのであろうと思っていた「回」にはこのような書き方があったのです。小学校で学習する漢字には「口」や「くにがまえ」を含んだ漢字は多く出てきます。漢字一つ一つの書き方を学ぶのではなく、漢字を書く「決まり」を学習していけば多くの文字を書くときに応用できますね。こうやって「文字」と出会って、「文字」に興味を持つ子供達を育てていきたいと考えています。





※参考文献『新・字形と筆順』宮澤正明著（光村図書出版）

『御調文学』（尾道市文化協会）令和元年号掲載